# B4本読み第5回

# 内積と直交性

2020/05/08

実装担当:松林慶祐/テスト担当:重見開

# 目次

- 実装環境
- ユークリッド空間
- n- ノルム
- コサイン類似度
- 正規直交基底とユニタリ行列
- グラム・シュミットの正規直交化
- 正射影
- まとめ

#### 環境

- 実装環境
  - macOS Catalina (10.15.4)
  - Python 3.7.7
- スライド制作環境
  - Windows Home 64bit (1903)
  - Jupyter Notebook 6.0.3
  - Python 3.7.7

#### ユークリッド空間

ユークリッド内積を導入した空間のこと、一般的に知られている内積はユークリッド内積といい、 こつのベクトル  $x,y\in\mathbb{C}^N$  に対して、以下の式で表される。  $\langle x,y\rangle=y^Hx=x_1\overline{y_1}+x_2\overline{y_2}+\cdots+x_N\overline{y_N}$ 

また、内積はスカラであることから、順番を入れ替えると共役になる.

$$\langle oldsymbol{y}, oldsymbol{x} 
angle = oldsymbol{x}^H oldsymbol{y} = (oldsymbol{y}^H oldsymbol{x})^H = \overline{oldsymbol{y}^H oldsymbol{x}} = \overline{\langle oldsymbol{x}, oldsymbol{y} 
angle}$$

実数のN次元ユークリッド空間の場合は、 共役を考える必要がないため、簡潔に表記できる。  $\langle \boldsymbol{x}, \boldsymbol{y} \rangle = \boldsymbol{y}^T \boldsymbol{x} = x_1 y_1 + x_2 y_2 + \cdots + x_N y_N$ 

# ベクトルの直交性

二つのベクトル $m{x},m{y}\in\mathbb{C}^N$ の内積に対して, $\langlem{x},m{y}
angle=0$ 

が成り立つとき, $oldsymbol{x}$ と $oldsymbol{y}$ は**直交する**という.

# 実装課題1

ユーグリッド内積を求める(ついでに直交性も判定)関数を実装

# 関数の動作

- 1.二つのベクトルを入力(縦ベクトルを想定)
- 2.縦と横の場合はエラー,横同士の場合は縦に変換
- 3.2つ目に入力されたベクトルを共役なものに変換
- 4.成分同士を掛け合わせて加算
- 5.内積の結果が0であったら直交であると判断
- 6. 結果を縦ベクトルで出力

行列ベクトルを表すためにnumpyを使用

In [1]: import numpy as np

```
In [2]:
       def euclidean_inner_product(vector1, vector2, show_orth=False):
           # numpy配列変換
           x = np. array (vector 1)
           y = np. array (vector 2)
           #エラー処理
           trv:
               if not x. shape == y. shape: #横×縦, 成分数違いを検知
                  raise ValueError("ベクトルのサイズが違います")
               else:
                  pass
           except ValueError as ve:
               print(ve)
               return # 関数を抜けてNoneを返す
           # 共役をとる
           coni v = v. coni()
           # 成分ごとの積をとって加算
           tmp = []
           for i in range(x.size):
               tmp. append (x[i][0] * conj_y[i][0])
           res = sum(tmp)
           # 直交性の判断
           if round(res. 7) == 0:
               is orthogonal = True
           else:
               is orthogonal = False
           # 直交性の判別を返すかどうか
           if show orth == True:
               return res. is orthogonal
           else:
               return res
```

```
\langle x, y \rangle = (-3-9j), 直交かどうか=False \langle y, x \rangle = (-3+9j), 直交かどうか=False \langle x, y \rangle = 0, 直交かどうか=True \langle v, x \rangle = 0. 直交かどうか=True
```

## ノルム

ベクトルの長さを決める量のこと、 内積空間のベクトルx に対して

$$\|oldsymbol{x}\| = \sqrt{\langle oldsymbol{x}, oldsymbol{x}
angle}$$

をノルムと呼ぶ.

特に, ノルムが1のとき, xは単位ベクトルであるという.

ユークリッド空間のベクトル $oldsymbol{x}\in\mathbb{C}^N$ の場合に,ノルムは

$$\|oldsymbol{x}\| = \sqrt{\sum_{i=1}^N |x_i|^2}$$

のように要素で書き下すことができ、特にこのノルムを $l_2$  ノルム、または 2- ノルムと呼ぶ。

一方,

$$\|oldsymbol{x}\|_1 = \sum_{i=1}^N |x_i|^2$$

のように定義されるノルムを,  $l_1$  ノルム, または 1- ノルムとよび, 信号処理や機械学習で疎性(スパース性)を測るのに広く使われる.

# 実装課題 2

n- ノルムを求める(引数はベクトルとn)関数を実装

#### 関数の動作

- 1. ノルムを求めるベクトルと n を入力する
- 2.ベクトルの成分ごとに絶対値をとり, n乗する
- 3.n乗したものの総和をとり,n乗根を求める

```
In [4]:
       def n norm(vector, n=2):
            # 縦ベクトルに変換
           vec = np. array (vector) . reshape (-1, 1)
            #計算
           tmp = []
            for i in range (vec. size):
               # print(abs(vec[i][0]))
               tmp.append(abs(vec[i][0]) ** n) # 絶対値のn乗(たぶん複素数もOK)
           #全部加算してn乗根
           res = sum(tmp)**(1 / n)
            return res
        print("整数のみ {0}", format(x))
        x = [[-3], [2], [2], [3]]
        norm1 = n norm(x, 1)
        norm2 = n norm(x)
        print("1- ノルムは {0}¥n2- ノルムは {1}". format(norm1, norm2))
        print("異なる型同士 {0}". format(x))
        x = [[-3], [5, 6], [4+1i]]
        norm1 = n norm(x, 1)
        norm2 = n norm(x)
        print("1- ノルムは {0} ¥n2- ノルムは {1}". format(norm1. norm2))
```

#### 整数のみ [[2], [3], [-1]] 1- ノルムは 10.0 2- ノルムは 5.0990195135927845 異なる型同士 [[-3], [2], [2], [3]] 1- ノルムは 12.72310562561766 2- ノルムは 7.573638491504595

#### コサイン類似度

ノルムと内積によって導入される、二つのベクトルの角度のことで、パターン間の距離 を測るのに用いられる.

$$\cos heta = rac{\langle oldsymbol{x}, oldsymbol{y}
angle}{\|oldsymbol{x}\| \|oldsymbol{y}\|}$$

ベクトル同士の向きが近いほどなす角度が小さくなるので, コサイン類似度は小さくなり, 向きが異なるほど, コサイン類似度は大きくなる.

コサイン類似度は-1から1の値をとり、

コサイン類似度から  $0 \le \theta \le \pi$  の範囲で決まる  $\theta$  を**角度**と呼ぶ.

# 実装課題3

コサイン類似度を求める関数を実装

# 関数の動作

- 1.二つのベクトルを入力
- 2.課題1の関数を使って内積を計算
- 3. 課題 2 の関数を使ってそれぞれのベクトルの 2- ノルムを計算
- 4. 定義に従ってコサイン類似度を計算

コサイン類似度は 0.05227442125730368

#### 正規直交基底

N次元ベクトル空間の基底ベクトル  $\{oldsymbol{u_i}\}_{i=1}^N$  が

- すべて互いに直交
- すべての基底ベクトルのノルムが1

のとき, この基底を**正規直交基底**と呼ぶ.

#### 正規直交展開

N次元ベクトル空間 V の基底  $\{m{u}_i\}_{i=1}^N$  が正規直交性を満たすとき,V 内のベクトル $m{x}\in V$  は基底  $\{m{u}_i\}_{i=1}^N$  を用いて,

$$oldsymbol{x} = \langle oldsymbol{x}, oldsymbol{u_1} 
angle \langle oldsymbol{x}, oldsymbol{u_1} 
angle \langle oldsymbol{x}, oldsymbol{u_2} 
angle + \cdots + \langle oldsymbol{x}, oldsymbol{u_N} 
angle oldsymbol{u_N}$$

と展開できる. これを正規直交展開という.

 $\langle oldsymbol{x}, oldsymbol{u_N} 
angle$  が展開係数となっている.

#### ユニタリ行列

ある行列の逆行列とエルミート転置が一致しているような行列のこと、 すなわち,  ${m A}^{-1}={m A}^H$  より ${m A}{m A}^H={m A}^H{m A}={m I}$ が成り立つような行列のことをユニタリ行列という.

ユニタリ行列の列ベクトルは正規直交性を持つ.

正規直交展開の展開係数  $c_i = \langle m{x}, m{u_i} 
angle = m{u_i}^H m{x}$  を並べたベクトルを考えると,

開発数
$$oldsymbol{c}_i = \langle oldsymbol{x}, oldsymbol{u}_i 
angle = oldsymbol{u}_i^H oldsymbol{x}$$
  $oldsymbol{c} = egin{bmatrix} oldsymbol{u}_1^H oldsymbol{x} \\ oldsymbol{u}_2^H oldsymbol{x} \\ \vdots \\ oldsymbol{u}_N^H oldsymbol{x} \end{bmatrix} = [oldsymbol{u}_1, oldsymbol{u}_2, \cdots, oldsymbol{u}_N]^H oldsymbol{x} = oldsymbol{U}^H oldsymbol{x}$ 

のように表せる. この時  $m{U}$  は正規直交基底が列ベクトルとなっている行列である. つまり  $m{U}$  の列ベクトルが正規直交性をもつので,  $m{U}$  はユニタリ行列である.

ノルムについて考えると, $\|m{c}\|^2 = \|m{U}^Hm{x}\|^2 = \|m{x}\|^2$ となっていることから,ユニタリ行列は**ノルム変えない**性質を持つ.

#### 実装課題 4

ユニタリ行列かどうか判定する関数を実装

判別方法

- $1. \boldsymbol{A}^{-1} = \boldsymbol{A}^H$  (逆行列とエルミート転置が一致する)
- $2.oldsymbol{A}oldsymbol{A}^H = oldsymbol{A}^Holdsymbol{A} = oldsymbol{I}$ (逆行列とエルミート転置の積が単位行列になる)

⇒2番の方法を採用

### 関数の動作

- 1. 行列を入力
- 2.入力された行列のエルミート転置を取得
- 3. 行列とそのエルミート転置の積を計算
- 4. 用意しておいた単位行列と積が等しいか判別

# グラム・シュミットの正規直交化

直交ではない基底から,正規直交基底を生成する方法のこと. 以下の手順により,直交しているとは限らない基底  $\{u_i\}_{i=1}^N$  から 正規直交基底  $\{v_i\}_{i=1}^N$  を得ることができる.

1. 
$$m{v_1} = rac{m{u_1}}{\|m{u_1}\|}$$
2.  $m{i} = 2, 3, \cdots, N$ に対し以下の操作を繰り返す
A.  $\hat{m{u_i}} = \sum_{j=1}^{i-1} \langle m{u_i}, m{v_j} 
angle$ 
B.  $m{v_i} = rac{m{v_j}}{\|m{u_i} - \hat{m{u_i}}\|}$ 

# 実装課題5

基底をグラム・シュミットの正規直交化する関数を実装

#### 関数の動作

- 1. 正規直交化したい基底を並べた行列を入力
- 2. 手順(1) のとおりに1本目の基底を計算
- $3.i=2,3,\cdots,N$ に対し for 文を回すことで手順(2)の A と B を計算し残りの基底を計算

```
In [ ]:
        def Gram_Schmidt_orthonormalization(matrix):
            # numpy基底行列matrix u
            matrix_u = np.array(matrix)
            u_len = len(matrix_u)
            #第一手順
            u0 = np.array(matrix_u[:, 0]).reshape(-1, 1) # 一つ目の基底を縦ベクトルで取得
            v0 = u0/(n \text{ norm}(u0))
            matrix_v = np. array(v0). reshape(-1, 1)
            # 第二手順
            for i in range(1, u len):
                ui = np. array(matrix_u[:, i]). reshape(-1, 1)
                u = np. zeros((u len, 1))
                for | in range(i):
                    vj = np. array(matrix_v[:, j]). reshape(-1, 1)
                    u_ = u_ + euclidean_inner_product(ui, vj) * vj
                vi = (ui - u) / (n norm((ui - u)))
                matrix v = np. hstack((matrix v, vi))
            return matrix v
```

# 正射影

N次元空間 V に,ある部分空間 W を定義したとき,任意の  $x\in V$  に対して  $\langle y,x-y\rangle=0$  となるような  $y\in W$  を,xのWへの**正射影(直交射影)**という.

V の基底  $\{u_i\}_{i=1}^N$  が正規直交性を満たすとき,部分空間 W に対する  $m{x}$  の正射影を特に  $m{P}_wm{x}$  と表記し,以下のように表すことができる.

$$oldsymbol{P}_w oldsymbol{x} = \sum_{i=1}^r \langle oldsymbol{x}, oldsymbol{u_i} 
angle oldsymbol{u_i} = \left(\sum_{i=1}^r oldsymbol{u_i} oldsymbol{u_i}^H
ight) oldsymbol{x}$$

# 実装課題6

正射影を求める関数を実装

# 関数の動作

- 1. 基底を並べた行列と射影したいベクトルを入力する.
- 2.1つ目の基底ベクトルと射影したいベクトルの内積を計算し、1つ目の基底ベクトルをその値でスカラ倍する.
- 3.2つ目の基底ベクトルについても同様に行い、1つ目の結果とのベクトル和をとる.
- 4. それ以降も同様にして、基底ベクトルを内積でスカラ倍したものの総和をとる.
- 5.ベクトルが総和されたものを出力する.

```
In []: def orthogonal_projection(matrix, vector):
    x = np. array(vector).reshape(-1, 1)
    matrix_u = np. array(matrix)
    u_len = len(matrix_u)
    pwx = np. zeros((u_len, 1))
    for i in range(u_len):
        ui = np. array(matrix_u[:, i]).reshape(-1, 1)
        pwx = pwx + euclidean_inner_product(x, ui) * ui
    return pwx

In []: x = [[2], [3], [-1]]
    Pw = [[1, 0, 0], [0, 1, 0], [0, 0, 0]]
    print(orthogonal_projection(Pw, x))
```

#### まとめ

- ユークリッド内積や正規直交性について理解した
- Jupyter Notebook の使い方について理解した
  - OSの差を意識することなく使えた
  - RISE でのスライドづくりは Keynote, Powerpoint に比べて手間がかかった
- 例外処理の実装が難しかった